

# 土曜 ライフ・楽しむ

## 美文・達筆・意匠…捨てがたい便り

# わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



いに活用することにし  
た。データにする手間はあ  
るものの、量は激減します。

まだ断捨離真っ最中、書類の片づけに明け暮れています。特に郵便物は難物です。困ることのひとつは、「こんな時代があったのか。こんなこともあったな」とその便りを読み込んでしまうので、時間がかかることです。

膨大な量の中からわざわざ残しておいたのですから、なにかに残るものがあつたのでしよう。画家さんらから届く作品展の案内はどれも素敵な意匠で捨てがたい。案内を見て訪れた展示会もあれば残念ながら行けなかったもので、気に入ったデザインの案内状は残っていました。

また私が発行する「悠悠と。」への便りもあります。残しているのは励ましやお礼の手紙が主です。元気を届けようとしているのに、逆に私の方が元気をいただいたことが節目節目にありました。そんな便りも改めて読むとその時の心境がよみがえります。中には耳の痛い指摘が書かれたものも残っていました。すでにお亡くなりになつた方の手紙もなかなか始末しきれません。



もうひとつ困ることは、手書きのものが多く、身内自慢になります。今は亡き父親は達筆で、太い字で簡潔にグサグサと心に刺さる言葉がしたためられています。母は父と異なり筆まめで、こち

らも達者な字でこまごまとした事柄が記されていました。年齢とともに乱れてきた筆致に老いを感じたことを思い出します。両親に心配をかけていたんだなという内容で改めて反省するばかりです。

総じて年配の方の自筆の手紙は美しい。人柄や個性を感じます。達筆すぎてちょっと読みにくいところもたまにあります。流れるような文字の流れを拝見するとやはりうれしいものです。自分自身はほはフープロ打ちで、美しく書けないことが情けなく、少し悔しい思いをしています。

今はスキヤナーという便利で優秀な武器があるので、大

こんな作業の最中に九州に住む一回り以上年長の師匠から電話がありました。彼も今、身の回りを整理しているそうです。書をたしなみ、勉強家であり美文家でもある、特段に筆まめな人です。

「こんな言葉に出会った」という内容も多く、私の心にもしみたのでしよう。「手元に残る便りの中で最も多いのがあなたのだ」と話しました。すると、「それを俺に送ってくれ」と言います。「また仕事を増やして」と恨み言を言いたくなりましたが、どこかしら文豪の書いた手紙を記念館に贈るような趣もあり、ちょっとうれしく感じたのも事実です。